様式(細則5-2)

令和３年２月２２日

浜田市議会議長　川　神　裕　司　様

議員名　芦　谷　英　夫

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため（視察・研修）を（実施・受講）したので、その結果を報告します。

記

１、期　　日　　令和３年２月１４日（日）１３時～１５時

２、研修内容　　島根の歴史文化講座

３、研 修 先　　島根県芸術文化センター（益田市）

４、調査経費　　交通費　　１，４７０円（ガソリン代）

５、調査研究活動の概要　　別紙のとおり

浜田市議会
受付
3.2.22

島根の歴史文化講座 出席のため

令和３年２月２２日

１　日　時　　令和３年２月１４日（日）１３時～１５時

２　場　所　　島根県芸術文化センター（益田市）

３　概　要　　講演「石見の領主と戦国大名～益田氏らと毛利氏～」

県古代文化センター専門研究員　目次　謙一

講演後、益田市教育委員会　中司　健一さんと対談

４　要　旨

① 御神本兼高は、鎌倉幕府から石見国那賀郡と美濃郡の所領を認められ、石見国府にあったとされる御神本の地から、長野荘に移り益田氏を名乗り、益田氏を総領家として、三隅氏、福屋氏（有福・金城・旭）、周布氏、永安氏（弥栄）などが庶子家として独立し群雄割拠の時代をつくり、益田氏の影響と関係は石見地方に広く及んでいる。

② 永禄４年（１５６１年）、福屋氏、三隅氏、永安氏が滅び、慶長５年（１６００年）関ヶ原の戦いで敗れた毛利輝元は、周防と長門の２か国のみとなり、輝元の家臣益田元祥は周布氏とともに毛利氏に従い周防長門へ移り、益田氏は萩藩の永代家老として江戸時代を生き抜いた。

③ 令和２年には益田氏を中心とする中世文化は「中世 日本の傑作 益田を味わう―地方の時代に輝き再び―」として日本遺産に認定された。石見にはこのほか「津和野今昔―百景図を歩く―」、「北前船寄港地 船主部落の外ノ浦」、「９市町による石見神楽」、「縄文の森と銀（しろがね）の山」など、５つの日本遺産がある。

④ 石見地方は川筋にある平野や盆地ごとに国人領主が割拠してきており、出雲方面、広島方面、山口方面とも深いつながりがあり、それらを掘り起こし歴史的な広がりも検証する必要がある。

⑤ これらを互いに学びあい、相互交流を行い、歴史文化の検証、これらをつないだ観光コースづくりやイベントの開催などの可能性があり、圏域住民を巻き込んだ取り組みが必要であり、ここは行政や歴史文化関係者による知恵の出しどころである。

５　所　見

① 浜田市は開府４００年を契機として、江戸時代以降に歴史文化行政の軸を置きがちであり、中世以前から中世をも俯瞰し焦点を当てるとともに、明治時代、歩兵第２１連隊、産業近代化など眠れる地域資源を掘り起こす必要がある。

② 市では、歴史文化保存展示施設整備が検討委員会の展示部会、活用部会により検討されており、その中で小中高生への郷土歴史教育、市民への生涯学習などを進めることの意見が出されており、新しい施設整備ではこれを実現する必要がある。

③ 益田氏庶子家のうち、三隅氏ののろしリレーが行われ、城跡公園の整備なども進められているが、福屋氏、永安氏などでは発信する取り組みが弱く、周布城も顧みられることも少なく、散策道や案内板の整備、生涯学習に取り組む必要がある。

④ 上記５つの日本遺産は、自然、歴史、伝統文化、地域資源などこの地方に共通したものであり、これらを関連付け打ち出すこと、新たな取り組みが構想できないか、関係市町による協働した推進が必要である。

―以上―